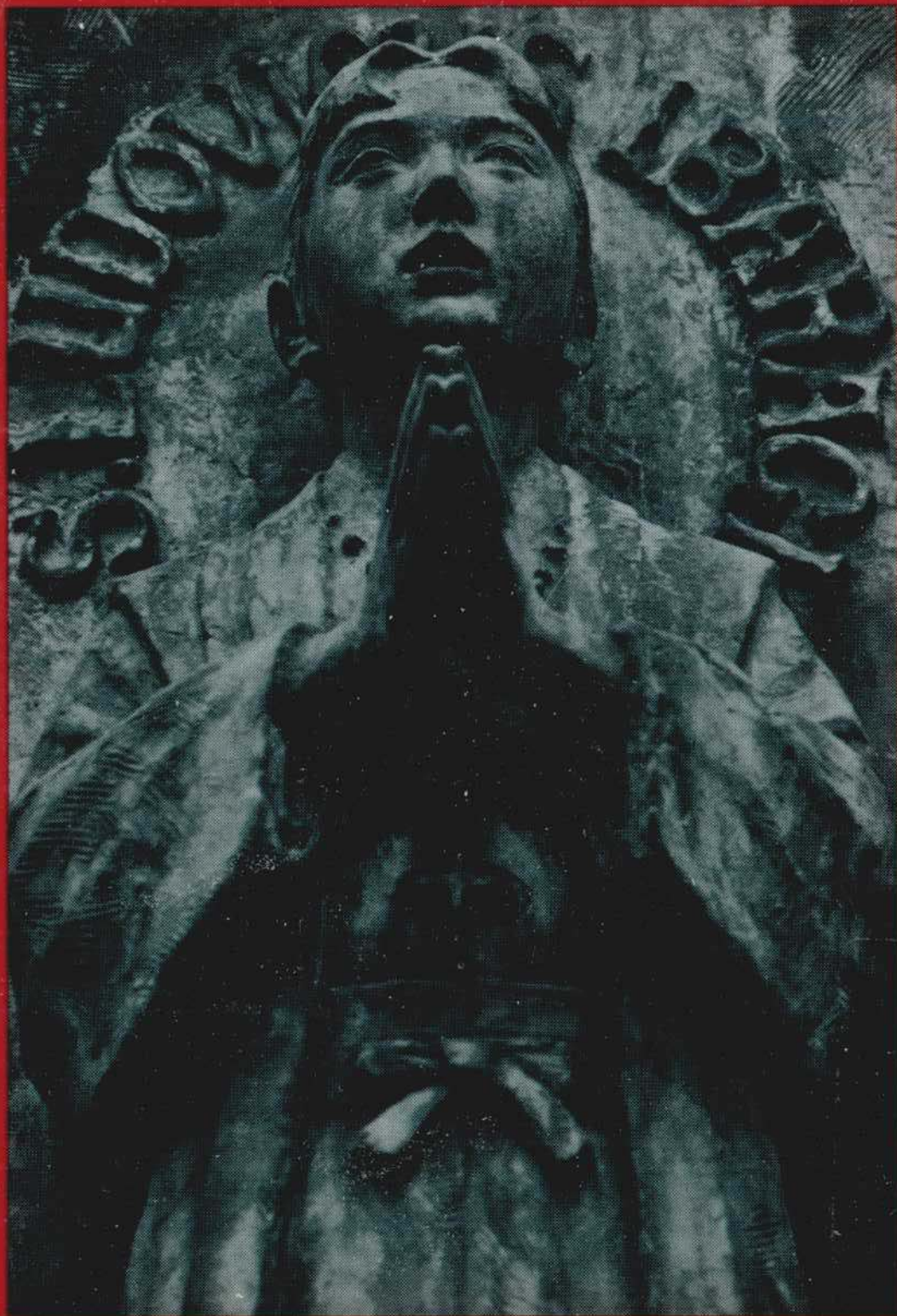


里の丹支切

遠藤周作



中公文庫

中公文庫 ©1974

切支丹の里

昭和四十九年四月十日初版
昭和五十六年二月十五日八版
著者 遠藤周作

発行者 高梨 茂

用紙 本州製紙
整版印刷 三晃印刷
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二一八一七
振替東京二二三四

定価 三〇〇円

中公文庫

里の丹支切

著者 周作藤遠



中央公論社

表紙・扉 白井晟一

目次

一枚の踏絵から

9

日記（フェレイラの影を求めて）

48

横瀬浦、島原、口ノ津

59

有馬、日之枝城

71

雲仙

84

弱者の救い——かくれ切支丹の村々——

102

父の宗教・母の宗教——マリア観音について——

125

母なるもの

137

解説

田中千禾夫

179

■使用写真

カバー表紙 西坂の二十六聖人像より

十二歳の少年殉教者ルドビ

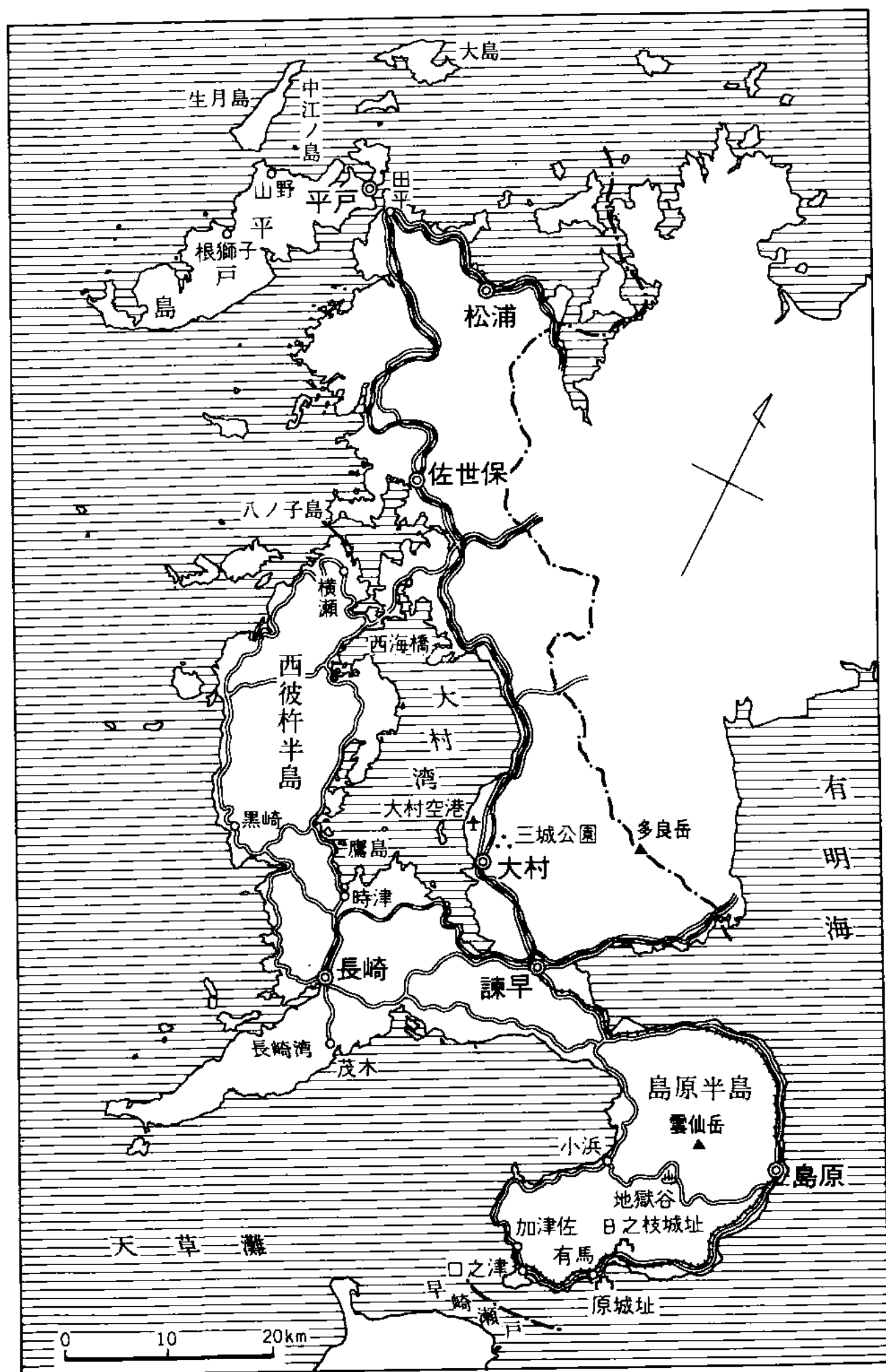
コ茨木像

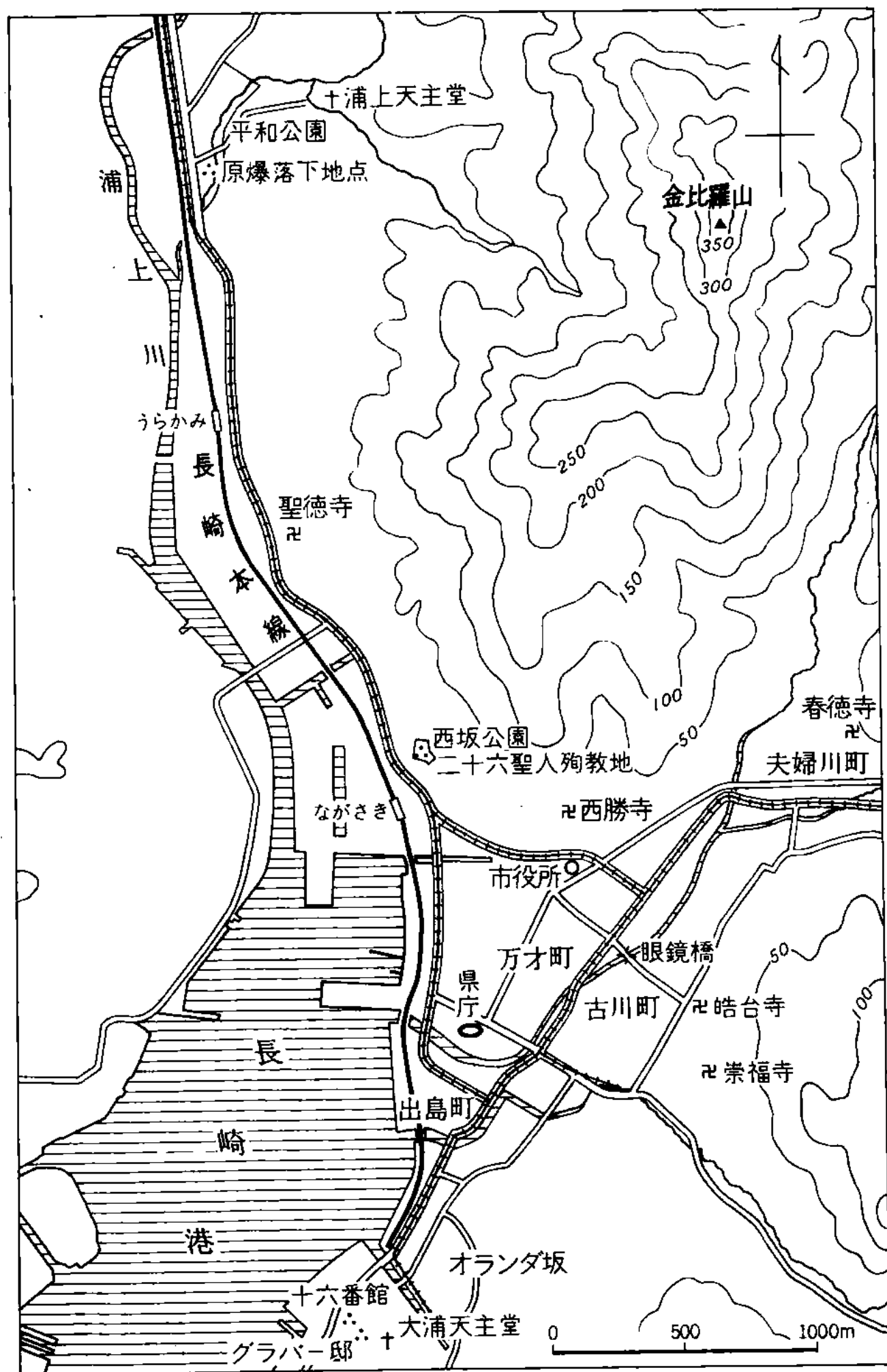
アートロ絵① 大浦天主堂横の坂道

② 横瀬から八ノ子島を望む

撮影・斎藤康一

切支丹の里





一枚の踏絵から

一

はじめて長崎の街に行ったのは格別な理由があつてではなかった。もともと見知らぬ街をふらりと訪れるのが好きだったから、仕事の暇があれば汽車に乗つて、あてもなく、偶然、停った駅でおりるといふことも度々あつたのである。

九州の街は熊本や鹿児島や福岡ならばかなり知っていた。いずれもその街を背景にした作品を書いていたためである。勿論、私は九州の出身ではなかったが、自分がえらんだ題材に適した背景が偶然、これらの街だったのだ。

だが長崎の街をその時たずねたのはそういう仕事のためではなかった、当時、私はこの街の歴史についてほとんど何も知らなかったし、切支丹時代について特に勉強したわけではなかったのだ。

だが見知らぬ街を訪れるというのは、ちょうど新しい本の最初の頁を開くのとよく似ている。本屋に入って書棚にずらりと並んだ本の一冊をぬきとり、頁の匂いをかぎ、走り読みをする。小説家である私には、私なりに本にたいする妙な直感があって、最初の頁や目次を見ただけで、この本がやがて自分にとって話しかけてくる本か、それとも一向に興味をひき起さぬ作品かが、大體わかるのである。

そしてそうした予想を抱いて買った本を我が家に持ってかえり、あらためて読む時、今まで知らなかった世界、今まで知らなかったものが突然、眼の前にひろがってくる。好奇心は疼き、その好奇心が頁をめくるたびに興味をふかめてくれる。

長崎の街は私にとって、まさしく、そんな都市だった。

はじめて長崎に行ったのはもう七、八年前の初夏だった。大村から長崎に行く道の両側に花の散ったあとの桜の若葉が茂り、楠の葉が光のなかでかがやいていた。私は友人から教えられた風頭山の頂上にある矢太楼という宿屋に泊り、眼下にひろがる午後の長崎の街とその周りの山々や、それから両手でかこまれたような長崎湾やその湾に浮かぶ船をぼんやり眺めた。

はじめての街がいつもそうであるように、宿の人から、あれが出島、あれが大浦の天主堂と指さされても、その歴史も背景もそれほど勉強したことのない私はただ、そうですかとうなずくだけで、特にこの街が自分の心に食いこんできたわけでもなかった。それらの場所も私にとっては、たんなる名所旧跡以上の範囲を出なかったのである。

ただ、なぜか知らぬが、この街とそれを取りかこむ眠いような空気の奥に、私の興味をひく何かがあった。その何かは勿論、自分でも名をつけることはできなかったが、本棚のなかから、未知の一冊の本を選び出した時の感じに似たものが胸の底から湧いてきた。

一冊の本を開いて、それが自分を惹きつけるか否かは、走り読みをしながら偶然、ぶつかった言葉や文字のせいである場合がままある。その言葉使い一つで、著者の発想法がおぼろげながら掴めるのである。

たった一つの言葉、偶然に眼にふれた一つの文字——もし長崎を本にたとえるならば、私にはその夕暮、眼にとまったものがそうだったのである。それは踏絵だった。偶然みた踏絵だった。

さて、その夕暮、何もすることがなかったからタクシーを頼んで街のなかを一通り見物することにした。矢太楼のフロントの話によると長崎のタクシーには私のような客のためにガイドをつけてくれるという話である。

私はお上りさんよろしく、その若い娘さんのガイドの乗ったタクシーに乗り、宿屋でもらった長崎の地図を膝の上にひろげて、街のなかをぐるぐると回った。眼鏡橋だの、思案橋だの、出島だの、平和公園だの、それからグラバー邸だの、それらは長崎を見物する人が必ず、まず訪れる場所なのだろう。十八、九の娘さんは暗記した通り、手ぶりを入れ、時には歌まで歌ってくれた。だが彼女の折角の努力にかかわらず、私は、急に一人になりたくなってきた。

大浦の天主堂の前まで来た時、もう夕暮だというのに、まだ沢山の観光バスがとまり修学旅行らしい高校生たちが騒ぎながら階段を登ったり、おりたりしていた。新婚旅行の若い夫婦があつち、こつちで写真を撮りあっている。

「さあ、おりました」

とガイドの娘さんは私を促した。

「いや、もういいよ」

私は首をふり、怪訝な顔をしている彼女に

「ここで帰ってください」

と言った。

「少し、ぶらぶらします」

「見物ばされんとですか」

「こう沢山の学生さんがいちゃあね」

「ほんと。いつも、そうです」

私は車を帰して、一人で歩きはじめた。何処にいく目当もなかった。芋を洗うように沢山の高校生がいる大浦天主堂を見物する気持もなかった。

私は教会の左側にそった坂道をのぼった。そこには人影がなかったからにすぎない。大きな楠があり、石段は少し急だったが、あたりは、静寂で、さっきの喧騒が嘘のようだった。

ふりかえると、そこから港と船と湾とが一望できた。私は石段に腰をおろし、そこから湾を眺めた。

この大浦天主堂の左の坂道はその後、長崎に行くたびに私の欠かすことのできぬ散歩道となった。朝、早くここを歩き、夕暮、ここを歩き、いつもそこは静寂で誰からも邪魔されることなく、長崎湾をみることができた。

私は階段をのぼって、右の方向に歩いた。いつの間にか道はとぎれ、すぐそこに十六番館と書いた建物があつた。そこにも女子高校生たちが十人ほど立っていたが、大浦天主堂ほどではない。「何があるの。ここは」

と私がたずねると

「明治の頃の外人が使っていた家具やお皿なんか、並べているんです」

と一人が教えてくれた。

「面白い？」

「いいえ」

彼女は首をふって白い歯を見せて、はにかみ笑いをした。

私だって、そんな明治初期に長崎に居留した外人たちの古家具や食器を見たいとは一向に思わなかった。だが天主堂のほうに戻る気がなかったから、そこで少しだけ時間をつぶそうと思ったのである。

十六番館はいかにも明治時代の木造西洋館という建物だった。そしてこのあたりにはむかしの神戸や横浜と同じようにペンキ塗りのそうした洋館や、少し黒ずんだ赤煉瓦の建物がいくつも残っているらしかった。

考えていた通り、中はつまらなかった。それほど良くもない古家具や食器を大事そうに並べた間を、私は通りぬけ、あくびをしながら外に出ようとして、ふと、出口にちかい一室で、何か黒い四角いものが硝子ケースのなかに置かれているのが眼にとまった。

踏絵である。ピエタ——つまり十字架からおろされた基督の体を膝にだきかかえるようにした歎きの聖母像を銅板にして、それを木のなかにはめこんだ踏絵である。

もちろん私はそれまで幾度か踏絵を見たことがあったから、この時が最初ではない。しかしこの夕暮の高校生たちが右往左往している薄暗い館内でしばらく、じっと立っていたのは、踏絵自体のためではなく、そとを囲んでいる木に、黒い足指の痕らしいものがあつたためであつた。足指の痕はおそらく一人の男がつけたのではなく、それを踏んだ沢山の人の足が残したにちがいがあつた。

その時、それほど深い印象を受けたという気持はなかった。私は十六番館を出て、もうすっかり灰色の夕靄に包まれた道で、折よく客をおろしたばかりのタクシーを掴えて宿屋に戻った。

二日後、東京に戻った私はその後の生活のなかで、ふとその踏絵のイメージを心に甦らせることがあつた。道を歩いている時や仕事をしている時、あの薄暗い十六番館の片隅でひっそりと置

かかれていた踏絵とその黒い足指の痕とが記憶の闕しきみの下から水の泡のように浮かんできた。

踏絵とは言うまでもなく切支丹時代から江戸時代に渡って切支丹を見つけるために採用された方法である。もし、それを踏めば許されるが踏むことを拒んだ者は拷問にかけられ極刑に処せられたのである。大体において寛永五年の頃、当時の長崎奉行、水野河内守が長崎で行わせたのが最初だと言われている。当時、使用したものは掛物の聖画が主だったが、これでは絵像が破れるため、寛永六年、後任奉行の竹中采女正は切支丹から没収した鋳物のメダリオンを板にはめて板踏絵をつくらせた。更にこれが不足すると本古川町に祐佐という職人に命じて真鍮の踏絵を更に作らせたことは、長与善郎の『青銅の基督』を読んだ私も知っていた。

そして私がその頃、考えていたことは誰もが考えるようなことにすぎなかった。第一に、あの黒い足指の痕を踏絵を囲む板に残した人たちはどういう人たちなのかと言うこと。第二にこれらの人はその足で自分の信ずるものの顔を踏んだ時、どういう心情だったのかと言うことだった。この二つの疑問はそれをその後、噛みしめているうちに次第に私には切実なものになりはじめた。なぜならば、それは強者と弱者、——つまりいかなる拷問や死の恐怖をもはねかえして踏絵を決して踏まなかった強い人と、肉体の弱さに負けてそれを踏んでしまった弱虫とを対比することだったからである。

こうして第二回目の長崎への旅の時は、私にもこの街に向きあう視点が幾分かはできあがって